

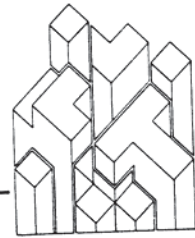
モノグラフ

中学生の世界

vol.17

©1984. 株式会社 福武書店 教育研究所 / 加藤智穂・和田京子・遠藤純子
放送大学教授 深谷昌志・東京学芸大学助教授 深谷和子

学校文化



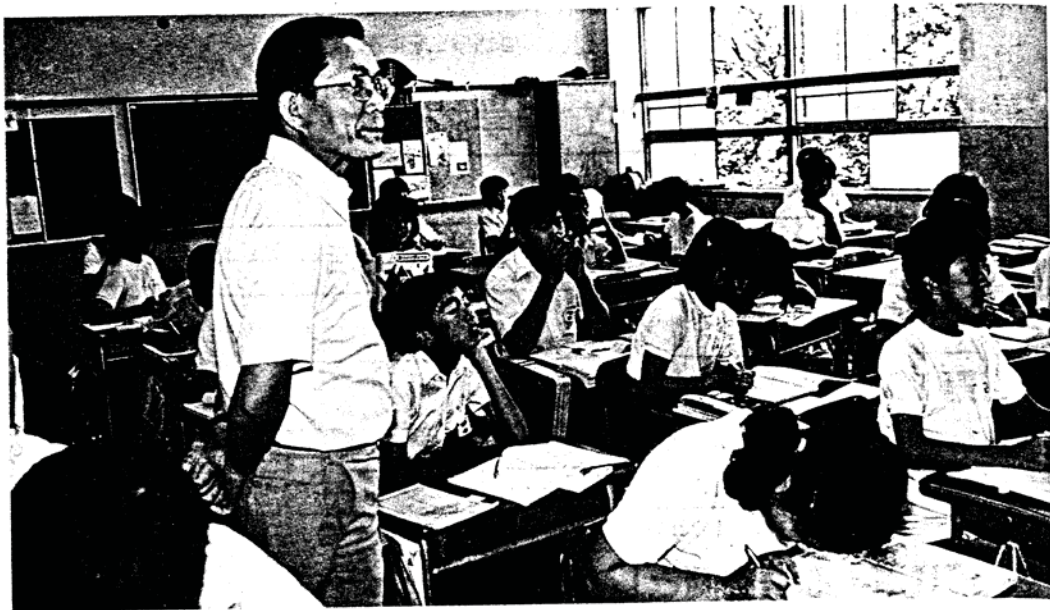
目次

特集 ● 生活の場として学校をとらえる	2
調査レポート ● 学校文化	
● パート1 中学生にとっての学校生活	深谷昌志 7
本報告書の要約	8
第I章 学校生活での充足感	
1. 学校の中での自己実現	9
2. 学年の重み	11
3. 学業成績の比重	16
第II章 心理空間としての学校	
1. 人間的な絆の狭さ	25
2. 心の通い合う範囲	27
3. 人間的なコンタクト	32
● パート2 中学校時代を終えて	深谷和子 39
第I章 中学生生活の概観	
1. サンプルについて	40
2. 生徒たちの人間関係	44
第II章 中学生生活の評価	
1. 授業とその周辺	47
2. 3年間の体験	51
3. 成長感覚をめぐって	54
4. 成長感覚の構造	59
5. 中学生生活についての後悔	63
資料1 調査票見本	66
資料2 学年・性別集計表	86

●特集

生活の場として 学校をとらえる

放送大学教授 深谷昌志



アメリカの学校で

学校という言葉に、なんとなく日本の学校を連想する。といっても、われわれは日本の学校で学び、そして、日本の学校を見聞きしているのであるから、日本以外の学校をイメージに抱けなくとも、ある意味では、当然という気がする。

「毎年四月になると、入学式をすませた1年生が、ランドセルを背負い、集団登校をする姿がみられる。やがて、学校給食が始まり、春の遠足シーズンを迎える。」

というような叙述は、ごくあたり前のように思われる。しかし、日本の学校を知らない人が、例えば、アメリカ人やヨーロッパ人が、

左記の文章を読むと、かなり理解に苦しむか、誤解をする可能性が強い。学年の始まりが9月なのはともかく、ランドセルや集団登校、遠足などは、欧米の学校では少ないだけに、意味がわかりにくかろう。また、小学校などでは入学式をしない国が多いので、小学校なのにどうして入学式を挙げるのか。儀式ばったことの好きな学校と思うかもしれない。

まして、新入生の親子が、洋服を新調して式に臨む。式場では、モーニングに威儀を正した校長の挨拶があるなどといえば、オリエンタル・ムードとみなすことはできても、自分たちの理解の枠外と思うのが、欧米人の率

直な感想であろう。

日本の学校は、国際的にみると、かなり偏った文化を保持している。そうした学校の姿が、現代の子どもたちの成長の仕方にマッチしていない。その辺に、現代の学校の危機が潜んでいるような感じがする。そこで、ごく標準的なアメリカの学校の姿を紹介してみよう。

学校を訪れると、外観そのものがいかにも明るく、日本の学校のもつ重々しさが見うけられない。教室へ入ってみよう。教室4つ分ぐらいの広いスペースのコーナーに、子どもたちが、思い思いの向きで、椅子に腰かけている。あるコーナーの窓際には算数のドリルのしまっているケースがあり、そのコーナーの子どもたちは、自分の学力に応じた用紙をとり出して計算を始める。

できあがった子は先生のところにドリルを持っていき、指導を受ける。熱心にドリルにとりくむ子もいる反面、ほんやりとよそ見をしている子の姿もある。中には、椅子を離れて、ぶらぶら歩き回る子もいる。声を出したり、いたずらをしたりして、友だちの勉強の邪魔をすると叱られるが、ひとりで静かに怠けているのなら特に注意を受けない。子どもたちの怠ける自由を認めているところが、いかにも、アメリカらしい。

別のコーナーでは、スライドを使って、理科の学習をしているグループもある。その他に、スペースの中央部にある図書コーナーで、ボランティアの母親が聞き役となって、読みの遅れがちな子に音読させているし、別室では、スペシャリストの教師が出張してきて、

学力不振ぎみの子どもを数名集めて、特別な指導を行っている。そうかと思えば、知的に恵まれた子どもたちのグループを作って、討議形式の学習を進めている姿もみられる。

学年を解体し子どもたちの個性や学力に応じて、グループ、あるいは、個別の学習を進めていく。こうした学校のあり方を「無学年制学校」(Non-graded School)とよぶ。また、教室の壁をはずし、相互に交流のできるような広いスペースを使って学習を展開していく形を「オープン・スクール」(Open School 厳密にはオープン・コンセプト)というのは周知の通りであろう。

もちろん、オープン・スクールでは小グループでの学習が中心となるので、学級という感じが薄れてくる。となると、教師サイドも、一人ひとりの教師がある学級を担任する形をとらないから、何人かの教師がグループを組んで、何クラス——同じ学年のこともあるし、学年が違う場合もある——かの子どもを指導する形となる。教師たちのこうした指導体制を、ティーム・ティーチング (Team Teaching) とよぶ。

無学年制学校やオープン・スクール、ティーム・ティーチングなどの教え方は、日本でも実践している学校があり、教育界にも知られているので、固有名詞をあげたが、実際にはそれぞれの学校により、さまざまな名称を使い、多様な実践が展開されているのがアメリカの学校である。このように、アメリカの教育では、子どもたち一人ひとりの個性が尊重され、日本の学校でみかける機会の多い一斉教授を行う場合は少ない。

香港の学校で

アメリカの学校と日本とでは、異質であるのがあたり前という感じがしないでもない。そこで、アジアの学校にモデルを求めてみよう。どこでも良いのだが、具体例として、ア

ジアの中では豊かといわれる香港の町を歩いてみよう。

高層ビルの並ぶ町並みを通っていると、二階とか三階とかに「學校」という字が目につ

く。ガイドに尋ねると、学校の看板だという。さっそく、そのうちのいくつかに入ってみた。フロアーの一～二室が学校のすべてである。当然、雨天体操場や理科室は論外としても、運動場や廊下のない学校が少なくない。ビルの一室を借りた学習塾が学校となったと思えば理解しやすかろう。子どもたちは、エレベーターを上がり下りしてすしづめの寺子屋風の学校に通学していた。それでも、こうした学校は、香港としては中程度のもので、ビルの屋上には、ワンルームだけのプレハブ制の学校があった。

香港では、1978年から9年制の義務教育制度が実施された。しかし、それは形だけで、未就学の子が少なくない。イギリスの伝統を受けつぎ、教育の私事性が保たれている上に、パスポートを持たずに入国した人でも、7年間の居住証明があれば、市民権を取得できる社会である。その上、治外法権的な感じのある九竜城もあるから、就学児数などは、必ずしも正確を期しがたい。

しかし、どこの学校へ通うのかは、その家庭の経済水準や人種を反映して、いくつかのタイプに分かれる。富裕層は、イギリスの大学か、あるいは、1911年以来の伝統を誇る香港大学へ子どもを入学させようとする。そのためには、イギリスと同程度の英語教育を行う英文中学へ在籍しなければならない。しかし、英文中学では、1年生から英語の教科書を使って授業するので、英語を使用する小学校へ入っておく必要がある。

しかし、そうした授業をしているのは、独立の校舎をもち、月謝のべらぼうに高い私立の小学校のみで、雑居ビルの中にある小学校や中文中学では、中国語が主たる言語で、英語は週に数時間しか行われていない。

1974年に法令が改正され、中国語も英語と並ぶ公用語となった。しかし、現在でも、しかるべき仕事につくためには、英語が不可欠な状況は変わっていない。したがって、香港の

子どもたちは、何語を主体とする小学校へ入るかによって一生が規定されることになる。

日本の佐渡ヶ島ぐらゐの広さに、500万人のひしめく世界屈指の人口過密都市である。その中には、いくつかの高層ビルのオーナーで、墓守りのいる冷房付きの墓地を持ち、ビクトリアピークの高台にそそりたつ西欧風の豪邸に住み、自分専用のナンバープレートをつけたロールスロイスを乗り回す桁はずれの金持ちもいれば、四畳半一間のアパートに大家族で暮らす家庭もある。

したがって、運転手付きの高級車に送られて英国風の小学校へ通う子もいれば、雑居ビルの一室にある中国式の学校へ行く子、さらに、プレハブ教室の夜学に在籍する子どもの姿もある。もっとも、新聞などで伝えられるように、租借契約の期限切れ(1997年)を十数年後に控え、香港そのものの成立している基盤が崩れかけ始めている。そのためこうした香港の姿がいつまで残り続けるのかは明らかでない。

社会の存在そのものが揺れているというのに、庶民はたくましく生活しているように見えるが、そうした感慨はともあれ、経済力や人種などの開きによって、教育を受けるレベルが決定的に違うなどということは、現在の日本では考えられない。

どこへ行っても、同じような校舎がたち、同じレベルの教育が行われている。そうした姿が行きすぎると、画一化とか中央集権化などの弊害が指摘されやすい。しかし、アジアはむろん、ヨーロッパでも、少なくとも、中等教育以降の学校は、家庭の階層文化に対応する形で分化しているのが通例である。そして、香港では小学校すら、分化していたのはすでに述べた通りである。

どこの地域のどのような家庭に生まれた子どもでも、日本にいる限り、少なくとも、9年間は無償に近い形で共通教育を受けられる。ともすると、あたり前と考えがちだが、外国

と対比させると、日本の学校制度は、学習機会の均等の保証された行き届いた制度だという気持ちがしてくる。

日本の学校の短所として指摘されがちな成績重視の文化にしても、ともすると、否定面のみが指摘されがちなが、そうした現象は、すべての子どもが高等教育への進学可能性を信じられるところから生じる競争過多の問題

であろう。もちろん、現在の学校文化が理想的などというつもりはない。しかし、伝統的な複線型にかわって、単線型の開かれた学校制度を作った。いわば、そうしたより理想に近づいた制度のもとで、新しい問題が生じたのだと、学業成績の良さを競う学校文化の背景をとらえておくのが妥当のように考えられる。

日本の学校文化

この他、それぞれの国には、いかにも、その国らしい学校文化の姿が認められ、ひとくちに学校といっても、現実の姿に、さまざまなスタイルがあるのがわかる。

それでは、われわれはつい、どこの国でもそうした学校があると思いがちになるのだが、日本の学校を、外部から見た時に、どのような特色が見い出されるのであろうか。日本の学校文化のもつ特色をいくつか列挙してみよう。

①学校としての規準が確保されている

日本の場合、どこの地域のどの学校へ入学しても、同じ程度の教育を受けられる。教育が地方自治の原則に基づいて運用されるので、欧米では、州や市により、教育内容はむろん、学校制度までも異なる場合が多い。しかし、日本では、文部省の規定により、学習指導要領や教科書などの内容面、あるいは、教室やプールなどの施設面でも、一定の規準が保たれている。そのため、一定レベルの教育を受けられる権利が保証されている反面、画一化が進みがちで、個性などの面で多様さが乏しくなる。

②伝達機能に優れている

学校は程度の差こそあれ、知識や技術を伝達する機能を担っている。中でも、日本の近代化は、外圧に触発された形で、急速に進展していったために、文明開化のかけ声とともに、土着の文化をきりすてつつ、西欧化を急

ぐ形をとった。もともと、近代化の遅れた社会の学校は、多かれ少なかれ、上からの改革という性格が強まるが、日本の学校も例外ではなく、西欧的な知識や技術の伝達に優れた効果を発揮することができた。つまり短期間に大量の人たちに基本的なものであれ、西欧を身につけさせることができた。そうした学校の働きは、日本の近代化を成功させる原動力であった。そして、そうした伝統は、現在でも受けつがれており、数学や理科の国際的な学力調査の結果が示すように、知識の伝達という意味では、世界でも数少ないくらいの有効性を発揮している。そうした反面、子どもたちは知識の受容に慣れ、自主的な学習習慣を身につけていない印象を受ける。

③子どもたちを集団として扱う

こうした文化のもつ特色も、前述したようなアメリカの学校などをイメージに置かないと、どうしてそれが特色なのか理解しにくい。

②でふれたように、日本の学校は、知識を効率よく伝達する特色をもつ。

そして、そうした優等生ぶりが圧縮された形で具現化されたのが、日本の学級であろう。中学校でも学級を単位とした生徒指導が語られることが多い。そして、小学校では、現在でも、子どもたちの学校生活は学級を単位として展開されているのは周知の通りであろう。特に、教育界には、伝統的に学級王国という考え方があり、子どものことは学級担任にま

かせる慣習が定着している。たしかに、学級を単位として、子ども集団をとらえ、そして、学級の枠を強くしていけば、一定量の知識や技術を能率よく伝達することが可能になる。その上、集団の中での行動の仕方も習得しやすい。

しかし、欧米の学校では、先に紹介したアメリカの場合のように、学習がそれぞれの子どもの個性に応じて、個別化されているので、学級が、日本ほどの重みをもたない場合が多い。

教育史的にとらえると、学級は、もともと一定量の知識を大量の子どもたちに能率よく伝達するのを目的として考案された制度である。しかし、教育という営みは、教師と子どもとの人間的なふれ合いを媒介として成り立つから、少人数の形が望ましい。日本に限っても、江戸末期の私塾や明治初期の慶応義塾、札幌農学校などで、師の影が大きな教育

力を発揮したのは周知の事実であろう。

そうした反面、少人数での教育は、理想的であっても、コスト高にならざるを得ない。そのため教育の対象が拡大されるにつれて、便宜上、学級制が学校の中に浸透してくる。したがって、教育の歴史をたどると、教育をめぐる条件がよくなるにつれて、つまり、その国が豊かになるにつれ、あるいは、学校段階では初等教育より高等教育で、学級のサイズが小さくなると同時に、学級の枠がゆるやかになる傾向が認められる。

そうだとすれば、世界有数の教育大国の日本で、今もって、学級王国的な学校文化が定着しているのが疑問に思えてくる。換言するならば、現在の学校に、とかくの批判が加えられるのも、学級集団の枠が固く、子どもたちの個性を伸ばしにくい点に、ひとつの遠因が潜んでいるような気がする。

生活の拠点としての学級

今までふれてきたように、日本の学校は、子どもたちを集団のメンバーとして位置づけ、そうした子どもたちに、知識や技能を伝達する意味では、優れた機能を果たしてきた。つまり、学力を保証する機能は、十分に担ってきたのである。

しかし、そうした反面、中学生たちは、学校の中で朝早くから夕方まで、生活している。つまり、単に勉強を教えてもらう場ではなく、学校は、生活の場としての意味を含んでいる。友だちと話したり、部活動に参加したりする意味をも、学校は含んでいるのである。

特に、中学生の時代は、小学生や高校生などと異なり、学校で暮らす時間がもっとも長く、部活動などに参加している生徒の場合、一日の生活が、学校を中心として成り立っているといっても過言でない。

そう考えてくると、学校を授業の場として

とらえるのと同時に、生活の場としてみ直す立場も必要となる。つまり、中学生たちの生活の拠点という角度から、学校をとらえ直してみたいのである。そうした角度でとらえた時、学校は、生徒たちに意味をもちうる場として機能しているのであろうか。

以下の調査では、心理空間としての学校、あるいは、成長感覚を身につける学校などという耳になじまない発想が登場してくる。そうした問題設定も、実は、生活の拠点として、中学校をとらえるところから登場してくる。学校が学力を授ける場であることは否定できない。しかし、そうした伝達面の機能とともに、生徒たちが、自主的に活動できる場に学校を変革していくことが不可能なのか。そうした問題意識に基づいて、以下の調査を実施したのである。

調査レポート●学校文化／パート1

中学生にとっての学校生活

放送大学教授 深谷昌志



PART 1

本報告書の要約

①自分らしさの発揮

友だちという時は、自分らしさを発揮していると思うが、授業の時は、自分らしさをもとも出せそうにない(P.11表3)。

②授業の理解

数学に例をとると、授業を7割程度理解できる生徒は47%と、半数を下回る。しかも、中1の61%から、中2の40%、中3の37%と学年が上がるにつれて、授業をわからないと思う生徒が増える(P.16表6、P.17表7)。

③自分は知られているか

同じ部活動や学級の友だちは、自分の名前や住所くらいは知っているだろう。しかし、学級が違えば、そして担任以外の先生は、自

分のことをほとんど知らないだろう。そして、同じ学級の友だちでも、自分の心の内は知らないと思う(P.28表17)。

④友だちのことを知っているか

同じ学級や部活動の仲間でも、その人が何に悩んでいるか、あるいは、誰が好きかといった心の内は、ほとんどわからない(P.33表21)。

⑤心配してくれるか

自分に何かあったら、同じ学級や部活動の友だちの内、半分ぐらひは心配してくれるだろう。しかし、その他の人はほとんど心配しないだろう(P.34表22)。そして、自分も、仲の良い友だちのことしか関心をもっていない(P.36図5)。

調査概要

対象●千葉県(3校)、北海道・札幌(1校)、
合計4校の中学1・2・3年生2,777名
期間●昭和58年7月
方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル数 (人)

学年	性別		計
	男子	女子	
中 1	513	475	988
2	446	413	859
3	483	447	930
計	1,442	1,335	2,777

第 I 章 学校生活での充足感



1. 学校の中での自己実現

生徒たちは、毎日、元気に通学している。就学を義務づけられているといえどもそれまでだが、生徒たちは、そうした義務感を越えて、学校生活をそれなりに楽しんでいるように見える。

そこで、学校生活に対する充足感を、「あなたの学校」あるいは「あなたの学級」に分けて、満足感を尋ねると、表1の通りとなる。最頻値に○を付したので明らかなように、全体としてみると、生徒たちは、学校、そして学級について、「やや」という程度の弱いものであるにせよ、一応、満足感を抱いているのがわかる。つまり、学校や学級に「とても

満足」しているとはいえないが、そうかといって、「不満」でもない。したがって「まあ満足」というあたりが、学校に対する生徒たちの平均的な感覚のように思える。

そこで、設問の仕方を変えて、「あなたは現在、学校へ通うのが楽しいですか」と尋ねてみると、表2のような結果が得られる。

楽 しい	{	とても	14	} 50%
		かなり	17	
		や や	19	
ふつうくらい				30%

楽しくない $\left\{ \begin{array}{l} \text{やや} \quad \text{やや} \quad 6 \\ \text{あまり} \quad 6 \\ \text{ぜんぜん} \quad 7 \end{array} \right\} 19\%$

半数程度の生徒は、学校に楽しさを感じているが、楽しくない生徒が2割に達する。しかも、そうした楽しさを味えない生徒が、

中1 中2 中3
13% < 19% < 28%

と学年が上がるにつれて増加しているのが注目をひく。

こうした学年のもつ意味については、あらためてのちにふれるとして先へ進もう。ひとくちに、学校あるいは学級に対する充足感といっても、いくつかの場面が考えられよう。

「あなたは、次のような時に自分らしさを発揮していると思いますか」の結果を表3に示した。ここでは、「自分らしさの発揮」という用語に留意してほしいと思う。

自己実現という考え方がある。自分らしさを十分発揮できれば、当然、自己実現されていると思えるし、そうした場でなら、充足感ももてよう。したがって、表3は、見方によると、生徒たちが、学校生活のどの領域で、自己実現しているのかを尋ねた設問でもある。表3をさらに要約してみよう。

	自分らしさを発揮している			発揮していない		
	(とても かなり)	(やや)	(あまり ぜんぜん)	(とても かなり)	(やや)	(あまり ぜんぜん)
授業の時	14%	31%	55%			
部活動の時	43%	34%	23%			
友だちといる時	62%	27%	11%			
家庭にいる時	58%	25%	17%			

友だちといる時や家庭の中では、自分らしさを出しているつもりだ。しかし、残念ながら、授業の時は、自分らしさを出している気持ちがないという反応である。

1-(表1)学校に対する満足感

→全体としてやや満足

項目		満足感		満足			不満足		
		とても	かなり	やや	やや	かなり	とても		
あなたの学校	友だち	15.5	29.2	36.0	12.6	2.9	3.8		
	部活動	14.2	21.0	30.0	19.4	7.2	8.2		
	先生	7.9	16.7	36.5	21.5	7.4	10.0		
	全体として	8.4	19.9	41.6	19.5	4.5	6.1		
あなたの学級	友だち	19.3	31.2	31.5	11.7	2.9	3.4		
	先生	16.2	17.9	29.0	14.6	6.8	15.5		
	雰囲気	13.2	19.6	32.2	21.9	6.7	6.4		
	全体として	11.8	19.9	38.4	18.4	5.5	6.0		

○=最頻値

1-(表2) 学校へ通う楽しさ

(%)

学年・性別	楽しさ							
	とても楽しい	かなり楽しい	やや楽しい	ふつうくらい	やや楽しくない	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない	
全体	14.3	17.4	18.7	29.8	6.3	6.2	7.3	
中	1	20.4	20.9	18.1	27.4	4.9	4.2	4.1
	2	13.4	18.2	19.7	29.7	5.2	6.3	7.5
	3	8.6	12.9	18.4	32.3	9.0	8.3	10.5
男子	13.5	16.2	19.2	31.1	6.3	5.7	8.0	
女子	15.1	18.6	18.1	28.5	6.4	6.8	6.5	

○=最頻値

1-(表3) 自分らしさの発揮

→友だちといる時が楽しい

(%)

項目	発揮している			発揮していない	
	とても	かなり	やや	あまり	ぜんぜん
授業の時	4.0	9.8	31.0	42.9	12.3
部活動の時	16.3	26.5	33.8	16.6	6.8
友だちといる時	26.4	35.5	27.2	8.1	2.8
家庭にいる時	30.2	28.1	25.0	11.2	5.5

○=最頻値

2. 学年の重み

今までふれてきたように、学校生活はまあまあ楽しい。その中でも、友だちといる時に充足感をもてる。しかし、授業の時は小さくなっているというのが、中学生の学校生活についての評価で、考え方によれば、当然の結果という感じがしないでもない。

しかし、表3を学年別に集計し直すと、表

4の通りとなる。すでに、表2で、学年が上がるにつれて学校へ通う楽しさが低下するとの傾向が得られているが、表4にも、それと同じ結果が認められる。

そこで、「とても」「かなり」発揮しているに着目して、学年別の推移をグラフ化すると、図1の通りとなる。友だち関係や家庭の中で

も、自分らしさの発揮について、69%(中1)から55%(中3)、あるいは65%(中1)から51%(中3)へと、中1と比べ5割程度へ低下する結果が得られている。学年が上がるにつれて、自分らしさの発揮に大きな期待を抱く。しかし、実際問題として、まだ、個性が作られていないし、自分らしさを発揮できない。自分の力に対する一種の失望感が、発揮している割合の低下を招くのであろうか。

しかし、そうした一般的な低下以上に、授

業の中での自己発揮は、22%(中1)から8%(中3)へと、1割を下回っている。

さらに、学校に対する満足感(全体の傾向はP.10表1を参照)を、学年を追って調べると、表5の通りで、これは、以下のように要約できよう。

	中1(A) → 中3(B) =	B/A
友だち	50% → 38% =	0.76
先生	39% → 17% =	0.44

1-(表4) 自分らしさの発揮×学年

→学年が上がるとシラけるのか

(%)

項目	学年	尺 度	発 揮 し て い る			発 揮 し て い な い	
			と とも	か な り	や や	あ ま り	ぜん ぜん
授業の時	中 1		5.8	15.7	40.0	32.4	6.1
	2		3.5	7.4	28.2	48.4	12.5
	3		2.5	5.9	24.2	48.7	18.7
部活動の時	中 1		20.4	30.8	31.8	13.0	4.0
	2		14.1	25.7	34.0	18.6	7.6
	3		13.8	22.4	35.8	18.7	9.3
友だちといる時	中 1		32.1	36.9	22.6	6.9	1.5
	2		24.8	36.8	27.7	7.5	3.2
	3		21.9	33.0	31.5	9.8	3.8
家庭にいる時	中 1		37.2	28.2	22.5	8.2	3.9
	2		29.4	28.4	26.4	10.9	4.9
	3		23.6	27.7	26.3	14.6	7.8

設問・あなたは次のような時に、自分らしさを発揮していると思いますか。

全体 40% → 19% = 0.48
 (「とても」「かなり」満足している割合)

つまり、学校へ通う楽しさが、学年が上がるにつれて半減しているのが明らかとなる。高校進学が迫ってきて、のんびりとできなくなる。それに、夏休みを過ぎると、部活動も終わりを迎える。そうした味気なさが、学校生活に対する充足感のなさを、中3に増加させるのであろう。

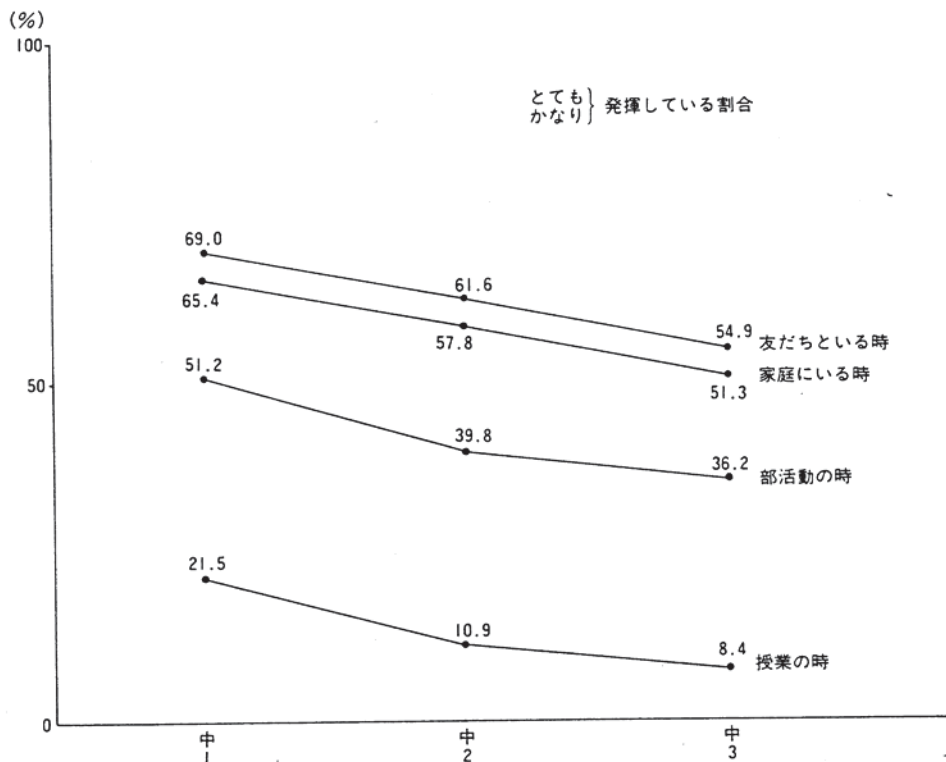
このように見てくると、学年が上がるにつ

れて、学校生活に充足感を抱けなくなるのは否定しがたい。しかし、そうした形で充足感をもてない生徒は、中学3年生だけに限られていまい。

そこで、数量化II類で学校へ通う楽しさを分析すると、図2のような結果となる。①の学校から⑨の先生から信頼されているかまでの9つの変数について、偏相関係数に着目してみよう。なお、係数はその変数の説明力の大小を意味している。

1-(図1) 自分らしさの発揮×学年

→授業で自分らしさは無理



- ①部活動 (0.122)
- ②先生からの信頼 (0.116)
- ③進路 (0.107)
- ④親との関係 (0.103)
- ⑤学校 (0.101)
- ⑥学年 (0.099)

したがって、学校についての充足感が、学年が上がるにつれて低下するのはたしかだが、充足感を規定している要因が、学年の他にも部活動の有無、進路、学校差などであること

がわかる。

こうした変数に、具体的なアイテムを配慮して、学校へ通う楽しさを分析すると以下のようなプロフィールが浮かんでくる。

(1) 学校が楽しいと思える生徒

- ①先生から信頼されている (0.69)
- ②部活動に熱心に参加している (0.54)
- ③親との関係もうまくいっている (0.38)
- ④4年制大学志望 (0.37)
- ⑤1年生 (0.34)

1-(表5) 学校への満足度×学年

→中1 > 中2 > 中3

(%)

項目	学年	満足				不満		
		とても	かなり	小計	やや	やや	かなり	とても
友だち	中1	19.5	30.7	50.2	32.0	12.0	2.8	3.0
	中2	14.2	31.4	45.6	37.4	10.9	2.6	3.5
	中3	12.3	25.6	37.9	38.7	14.9	3.5	5.0
部活動	中1	24.4	27.1	51.5	29.2	11.8	3.4	4.1
	中2	11.0	20.4	31.4	29.8	22.3	8.9	7.6
	中3	6.4	14.9	21.3	31.3	24.7	9.7	13.0
先生	中1	13.5	25.2	38.7	39.8	12.8	3.6	5.1
	中2	5.3	11.9	17.2	37.9	26.0	9.7	9.2
	中3	4.5	12.2	16.7	31.4	26.6	9.3	16.0
全体として	中1	13.1	27.0	40.1	39.0	14.1	2.9	3.9
	中2	7.5	17.5	25.0	44.0	21.5	3.5	6.0
	中3	4.3	14.5	18.8	42.3	23.3	7.0	8.6

(2) 学校が楽しいと思えない生徒

- ①部活動に参加していない (-0.74)
- ②就職志望 (-0.60)
- ③3年生 (-0.56)
- ④親ともうまくいっていない (-0.49)
- ⑤先生からも信頼されていない(-0.45)

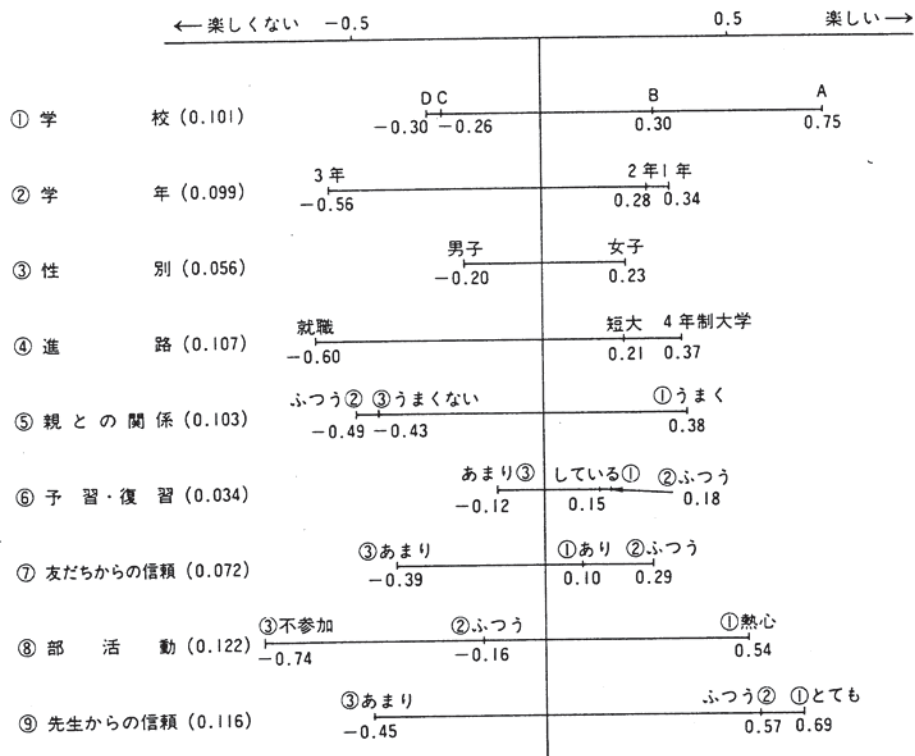
以上見てきた結果を大づかみにすると、学校に充足感をもっている生徒は、意欲にみちみちいて、誰からも信頼されているのに対し、充足感をもてないでいるのは、無気力で、誰

からも好感を抱かれない生徒であるのがわかる。

そうした生徒のプロフィールが、学校に対する充足感に関連するのは経験的に考えても納得できる感じがする。したがって、学年が上がるにつれて、充足感が減退するのはたしかにしても、それを、過大に評価するのは誤りなのかもしれない。

1-(図2) 学校へ通う楽しさ

→楽しく通学しているのは、先生から信頼されている部活動に熱心な中!



3. 学業成績の比重

学校生活に対する充足感が、図2のような要因群から説明されるのはたしかであろうが、そうした背景に、学業成績の良し悪しが見えかくれしているように思える。

表6は、授業の理解度を示しているが、最頻値に注目すると、

7割ぐらいわかる——英語と数学

半分ぐらいしかわからない——国語、理科、
社会科

となる。そこで、授業の理解度を、学年、性、学業成績別にクロス集計を試みると、表7のような結果となる。

成績の上位の生徒は、授業を理解している。しかし、成績が下位になるにつれて、授業の理解度が低下する。ある意味で、当然といえる結果だが、その差が予想される以上に大きいのは、図3に示した通りである。

授業がわかるから成績が良い。あるいは、成績の上位の生徒は授業がわかる。いずれのサイドからの説明も可能であろうが、それと同時に、学年が上がるにつれて、授業を理解できる割合が、中1=61%、中2=40%、中3=37%(数学)と、低下しているのが注目をひく。

1-(表6) 授業の理解度

→半分～7割ぐらい理解できる

(%)

理解度 授 業	理 解 でき ている				ほ と ん ど 理 解 できていない
	100%	70%	半分ぐらい	30%	
数 学	11.7	34.7 (46.4)	29.0 (75.4)	16.1 (91.5)	8.5
国 語	5.4	33.0 (38.4)	40.8 (79.2)	15.2 (94.4)	5.6
理 科	7.3	29.2 (36.5)	37.2 (73.7)	19.6 (93.3)	6.7
英 語	9.6	31.0 (40.6)	29.1 (69.7)	18.7 (88.4)	11.6
社 会 科	7.8	27.1 (34.9)	34.5 (69.4)	20.9 (90.3)	9.7

○ = 最頻値

そして、表8に示すように、勉強に苦手意識をもつ生徒も、中1の16%から中2の26%へと増加し、そして、中3では31%と、3割

を超えるに至る。

学年が上がるにつれて、授業を理解しにくくなり、そして、学業成績に自信を抱けなく

1-(表7) 授業の理解×属性

→学年が上がると理解できない割合が増す

(%)

授業	属性		理解度		理解できている			理解できていない	
			100%	70%	小計	半分ぐらい	30%	ほとんど	小計
数	学年	中1	18.2	42.5	60.7	26.4	9.2	3.7	39.3
		中2	8.1	32.0	40.1	29.0	20.2	10.7	59.9
		中3	8.2	29.1	37.3	31.7	19.6	11.4	62.7
	性別	男子	15.1	38.4	53.5	26.8	12.3	7.4	46.5
		女子	8.0	30.9	38.9	31.3	20.2	9.6	61.1
	学	成績	上位	43.3	42.2	85.5	11.8	1.0	1.7
中ノ上			16.9	49.9	66.8	25.3	6.0	1.9	33.2
中位			3.6	33.2	36.8	38.5	20.3	4.4	63.2
中ノ下			1.9	18.5	20.4	34.0	31.4	14.2	79.6
下位			4.5	9.6	14.1	18.9	26.5	40.5	85.9
英	学年	中1	16.4	38.1	54.5	28.2	11.5	5.8	45.5
		中2	6.3	28.4	34.7	32.2	20.5	12.6	65.3
		中3	5.4	25.9	31.3	27.2	24.7	16.8	68.7
	性別	男子	10.8	30.3	41.1	27.3	19.2	12.4	58.9
		女子	8.3	31.8	40.1	31.1	18.1	10.7	59.9
	語	成績	上位	36.4	46.0	82.4	10.8	4.4	2.4
中ノ上			14.0	45.0	59.0	26.9	10.3	3.8	41.0
中位			2.7	27.2	29.9	41.2	22.2	6.7	70.1
中ノ下			1.3	15.6	16.9	27.4	33.4	22.3	83.1
下位			3.1	7.9	11.0	16.8	26.5	45.7	89.0

○ = 最頻値

なる。こうした授業面でのつまずきが、すでにふれた学年が上がるにつれて、学校に充足感を抱けなくなる背景であろう。ところで、そうした成績の良し悪しは、授業以外の場面で、生徒たちの気持ちをどの程度、拘束しているのだろうか。

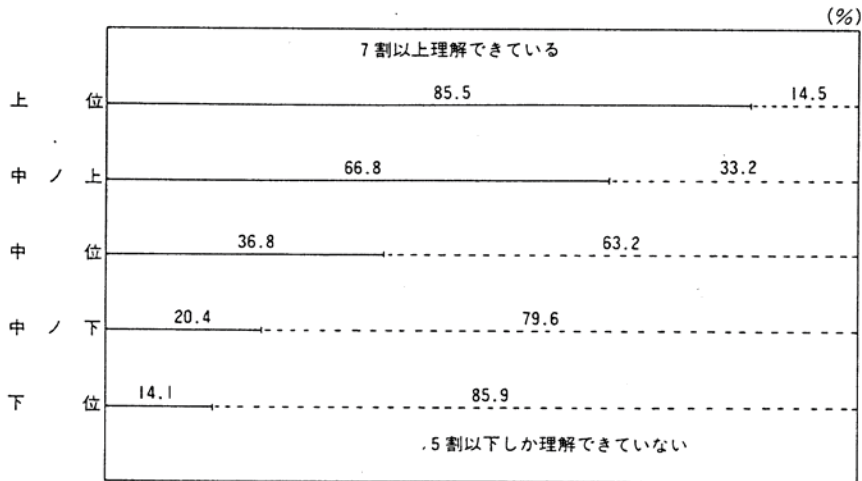
表9は、通学の楽しさを学業成績にクロスさせたもので、これを図化したのが、図4である。勉強の得意な生徒の51%は学校が「とても」あるいは「かなり」楽しいと思ってい

るのに対し、勉強のやや苦手な生徒が、学校を楽しいと思える割合は25%と半減し、さらに、とても苦手な生徒が学校に充足感を抱ける割合は、17%となる。

そこで、もう少しこまかく、中学生生活を領域に分け、それと成績との相関を求めると表10のような数値となる。

勉強が とても 得意 25%
 やや 苦手 17%
 とても 苦手 11%
 ○先生への満足 42% > 20% > 11%

1-(図3) 授業(数学)の理解×成績



1-(表8) 成績×学年

→学年が上がると苦手の割合が多い

勉強 学年	得意			苦手					
	とても	かなり	小計	やや	やや	小計	かなり	とても	小計
中1	3.8	11.8	15.6	34.4	34.2	68.6	9.6	6.2	15.8
2	2.1	8.3	10.4	29.0	34.5	63.5	14.4	11.7	26.1
3	1.3	4.8	6.1	27.2	35.5	62.7	17.0	14.2	31.2
全体	2.4	8.3	10.7	30.3	34.8	65.1	13.6	10.6	24.2

- 友だちへの満足 55% > 41% > 34%
 - 部活動への満足 44% > 32% > 24%
 - 全体としての満足 43% > 25% > 17%
- 「とても」「かなり」満足している割合

つまり、学業成績が不振になるにつれて、教師との関係だけでなく、友だちへの満足感や部活動への充足感なども低下していく。学校の主たる機能は学習の場であり、学習の程度は、当然のことながら、学業成績となって表れてくる。したがって、学業成績の得意な

生徒は、授業以外の場面でものびのびとした感じをもてる。しかし、勉強が苦手だと、その他の場面でも、なんとなく小さくなって暮らすようになるのかもしれない。

もともと、表11に示したように、勉強が得意だと、望みの高校へ入れ、大学進学も可能で、社会的に重要な仕事につけると、将来に明るい見通しを抱くことができる。そうだとすると、勉強の得意な生徒が、自信に満ちた生活を送るのは当然なのかもしれない。

1-(表9) 通学の楽しさ×成績

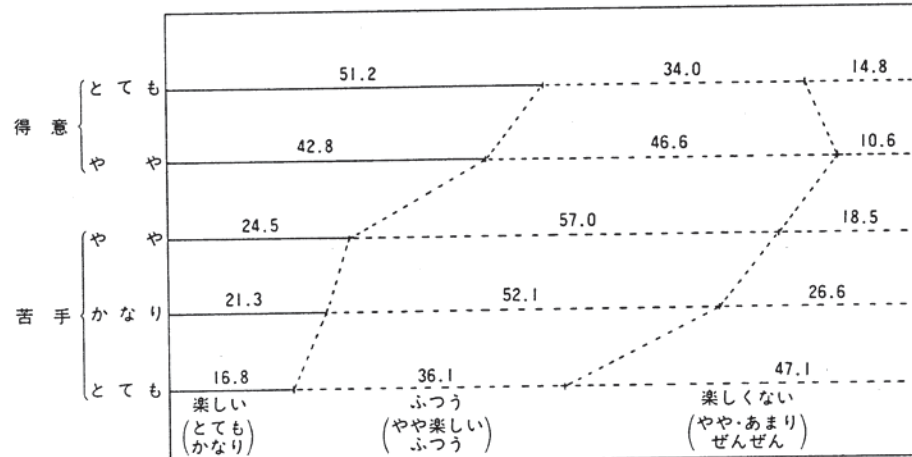
→ 勉強が得意だと楽しく通学

(%)

勉強	通学の楽しさ	楽しい				ふつう くらい	楽しくない		
		とても	かなり	小計	やや		やや	あまり	ぜんぜん
得意	とても	30.7	20.5	51.2	17.5	16.5	3.4	4.0	7.4
	やや	19.4	23.4	42.8	21.1	25.5	4.1	2.9	3.6
苦手	やや	8.7	15.8	24.5	20.4	36.6	6.9	6.8	4.8
	かなり	8.9	12.4	21.3	15.9	36.2	10.2	10.2	6.2
	とても	7.9	8.9	16.8	11.0	25.1	8.6	11.3	27.2

1-(図4) 通学の楽しさ×成績

(%)



それに反し、表12に示したように、「自分は駄目な人間だ」と思う割合は、勉強が苦手になるにつれて増加し、勉強がかなり苦手だと半数近くの生徒がそう思うと答えている。

そうした傾向は、表13にもうかがうことができる。これを、さらに要約してみると、以下の通りとなろう。

		授 業	部活動	友だちと
得意	ととも	46%	60%	74%
	やや	17%	51%	66%
苦手	やや	7%	39%	61%
	かなり	6%	28%	55%
	ととも	6%	33%	55%

(自分らしさを「ととも」「かなり」発揮している割合)

すでにふれた表10の結果と同じように、勉強の得意さは、授業だけでなく、部活動で友だちといえる時に自分らしさを発揮しているかについても、強い影響力を与えている。

そこで、勉強の得意、苦手が、学校での時間帯によって、どの程度異なるのかを示したのが、表14である。一応の目安として、勉強の「とても」苦手(C)な生徒の充足感が、勉強が「とても」得意(A)な生徒の充足感とほぼ同じなら○、2分の1以下なら×、4分の1以下だと××だと分類してみた。

(1)成績によって充足感のあまり変わらない時間帯

- ①休み時間

- ②体育祭や文化祭
- ③友だちとの雑談
- ④給食の時間
- ⑤授業の終わった時など

(2)成績によって充足感が異なる時間帯

- ①生徒会や学活
- ②先生との会話
- ③夜勉強をしている時

(3)成績によって充足感がきわめて異なる時間帯

- ①授業の始まる前
- ②英語の授業
- ③数学の授業
- ④定期テスト

このように、授業時間の充足感は、当然のことながら、成績の良し悪しにより規定されるが、休み時間や友だちとの雑談の場面では、勉強が得意、不得意はそれほど大きな意味をもっていないように思える。

もちろん、教育的な見地で考えた場合、勉強に苦手意識をもつ生徒を、ひとりでも少なくすることが学校教育の課題であろう。しかし、そうはいうものの、中学校程度ともなると、すべての生徒が勉強に自信をもつのは理想として追い求めるべきであっても、現実問題としては、ある程度の割合で、勉強に苦手意識を抱く生徒が存在するのは避けられまい。したがって、勉強を苦手とする生徒を減らすのとは別の問題として、仮に、勉強が苦手であっても、学校に充足感をもてる。そうした場に、学校を変えていく努力が必要であろう。

1-(表10) 中学校への満足×成績

→成績の良さ=充足感

(%)

項目	満足感 勉強	満 足			不 満						
		とても	かなり	小 計	や や	や や	小 計	かなり	とても	小 計	
先 生	得意	とても	15.9	25.8	41.7	29.1	13.2	42.3	6.8	9.2	16.0
		や や	10.5	21.6	32.1	41.4	16.5	57.9	4.7	5.3	10.0
	苦手	や や	5.5	14.7	20.2	39.6	24.2	63.8	8.1	7.9	16.0
		かなり	5.1	11.2	16.3	34.5	28.1	62.6	10.7	10.4	21.1
		とても	3.4	7.9	11.3	20.3	27.5	47.8	9.6	31.3	40.9
部 活 動	得意	とても	20.5	23.6	44.1	29.2	11.1	40.3	7.3	8.3	15.6
		や や	17.7	25.3	43.0	28.5	16.6	45.1	6.5	5.4	11.9
	苦手	や や	11.9	19.8	31.7	33.0	22.7	55.7	7.2	5.4	12.6
		かなり	10.1	17.6	27.7	30.9	23.5	54.4	8.7	9.2	17.9
		とても	10.7	13.6	24.3	23.9	20.2	44.1	7.4	24.2	31.6
友 だ ち	得意	とても	25.4	29.9	55.3	27.8	9.8	37.6	2.0	5.1	7.1
		や や	16.3	35.0	51.3	35.3	9.2	44.5	2.5	1.7	4.2
	苦手	や や	12.3	29.1	41.4	40.2	12.8	53.0	2.6	3.0	5.6
		かなり	12.9	25.8	38.7	37.8	15.9	53.7	4.6	3.0	7.6
		とても	16.2	17.5	33.7	29.9	20.3	50.2	4.1	12.0	16.1
全 体 と し て	得意	とても	18.6	24.3	42.9	36.2	12.8	49.0	2.0	6.1	8.1
		や や	9.5	25.5	35.0	44.4	15.1	59.5	3.0	2.5	5.5
	苦手	や や	5.7	19.1	24.8	45.6	21.3	66.9	4.3	4.0	8.3
		かなり	5.9	14.0	19.9	41.1	25.8	66.9	7.8	5.4	13.2
		とても	7.2	9.3	16.5	26.6	25.2	51.8	7.2	24.5	31.7

1-(表11) 将来の進路×成績

→ 勉強が得意だと未来像は明るい

(%)

将来の進路 勉強	望みの高校	大学進学	難しい大学	社会的に重要な仕事	社会的に権威のある人	
	絶対たぶん入れる	4年制大学へ行きたい	なんともたぶん入れる	絶対たぶんつける	絶対たぶんなれる	
得意	ととも	65.9	37.1	33.9	22.3	
	やや	79.8	48.6	17.9	16.0	9.3
苦手	やや	62.2	27.5	8.3	8.8	5.0
	かなり	44.9	19.7	6.5	6.9	4.2
	ととも	36.7	23.2	16.0	14.0	12.0

1-(表12) 自己評価×成績

→ 勉強が苦手だと自信をもてない

(%)

自己評価 勉強	尺度	思う				思わない		
		ととも	かなり	小計	やや	あまり	ぜんぜん	小計
自分は駄目な人間だと	得意	17.6	17.6	35.2	31.5	23.5	9.8	33.3
	やや	14.6	18.0	32.6	42.3	20.9	4.2	25.1
	やや	16.1	17.9	34.0	46.1	17.1	2.8	19.9
	苦手	22.5	23.0	45.5	36.5	14.2	3.8	18.0
	ととも	41.6	17.4	59.0	19.1	11.1	10.8	21.9
全体		19.4	18.5	37.9	39.2	17.9	5.0	22.9

1-(表13) 自分らしさの発揮×成績

→授業はともかく、友だちといる時は

(%)

項目	尺度 勉強	発揮している			やや 発揮 している	発揮していない			
		とても	かなり	小計		あまり	ぜんぜん	小計	
授業の時	得意	とても	14.5	31.6	46.1	26.6	22.2	5.1	27.3
		やや	4.2	12.4	16.6	42.7	35.8	4.9	40.7
	苦手	やや	1.5	5.2	6.7	32.2	52.8	8.3	61.1
		かなり	2.2	4.1	6.3	19.5	56.4	17.8	74.2
		とても	3.4	2.8	6.2	13.4	32.8	47.6	80.4
部活動の時	得意	とても	26.8	33.1	59.9	26.1	9.2	4.8	14.0
		やや	20.4	30.7	51.1	32.4	14.1	2.4	16.5
	苦手	やや	12.5	26.2	38.7	36.8	18.9	5.6	24.5
		かなり	9.5	18.6	28.1	42.1	21.3	8.5	29.8
		とても	15.0	18.2	33.2	24.7	17.0	25.1	42.1
友だちといる時	得意	とても	43.2	30.4	73.6	18.6	6.1	1.7	7.8
		やや	26.5	39.3	65.8	26.2	7.3	0.7	8.0
	苦手	やや	22.1	38.6	60.7	28.9	8.7	1.7	10.4
		かなり	19.3	35.2	54.5	33.2	9.4	2.9	12.3
		とても	33.4	21.2	54.6	23.6	8.3	13.5	21.8

1-(表14) 時間帯×成績

(%)

時 間 帯 \ 勉 強	とても得意 (A)	やや苦手 (B)	とても苦手 (C)	C/A
① 朝起きた時	15.5	5.7	3.8	××
② 朝食の時	26.4	14.4	12.3	×
③ 授業の始まる前	17.5	4.0	1.4	××
④ 英語の授業	40.4	11.4	8.9	××
⑤ 休み時間	59.3	47.1	46.1	○
⑥ 生徒会や学活	20.7	8.5	9.7	×
⑦ 数学の授業	51.5	16.0	12.5	××
⑧ 定期テスト	30.3	7.2	5.2	××
⑨ 部活動をしている時(入ら... なかった人は8番)	50.2	35.3	27.6	○
⑩ 先生との会話	23.4	10.3	6.3	×
⑪ 体育祭や文化祭	59.8	47.6	44.9	○
⑫ 校外学習や修学旅行	82.6	75.3	60.9	○
⑬ 友だちとの雑談	73.7	66.3	62.5	○
⑭ 給食の時間	57.7	42.5	40.5	○
⑮ 授業の終わった時	63.3	55.1	60.9	○
⑯ 帰宅した時	62.8	50.9	48.7	○
⑰ 夕食の時	58.8	46.8	46.1	○
⑱ 夜のんびりしている時	71.7	65.3	64.0	○
⑲ 夜勉強をしている時	29.2	9.0	11.1	×
⑳ 夜テレビを見ている時	58.7	49.8	56.7	○
㉑ 夜寝る前	60.1	49.7	48.2	○

C/A { CがAの1/4以下 ××

 CがAの1/2以下 ×

 CがAとほぼ同じ ○

とても かなり まあ 半分 まあ あまり ぜんぜん
 充ちたりた 充ちたりた 充ちたりた 半分 充ちたりて 充ちたりて 充ちたりて
 感じ 感じ 感じ 半分 いない感じ いない感じ いない感じ

① ————— ② ————— 3 ————— 4 ————— 5 ————— 6 ————— 7

(%)

第II章 心理空間としての学校



1. 人間的な絆の狭さ

学校をすべての生徒にとって、充足感を抱ける場に変えていくのが必要だと述べた。たしかに、そうした学校が望ましいが、そのためには、友だちとの間で、そして、教師との間に、コミュニケーションが成り立ち、人間的な絆がはりめぐらされていることが前提となろう。換言するなら、人間関係で充実しているなら、仮に学業が不振ぎみであっても、学校に帰属意識をもち、学校に、わが生活の場としての気持ちを抱きうる。

やや先回りをした指摘をしたかもしれない。学校の中でも生徒相互の間では人間味あふれる交流がなされていて、学校が、生徒たちに

とっての心理空間になっている可能性も強い。

そうした意味で、学校の内部に、人間的な絆がどの程度はりめぐらされているのかを、検討することにした。

まず、表15に目を通してほしい。これは「学年の違う人」、「学級の違う人」、「担任以外の先生」について、その人たちの名前とどんな人柄なのかを、どの程度の割合で知っているかを尋ねたものだが、

①学年の違う人は、ほとんど名前を知らないし、まして、どんな人柄なのかほとんどわからない。

②担任以外の先生は、名前だけはだいたい

1-(表15) 校内の人を知っているか

→ 名前は知っていても人柄は知らない

(%)

項目	尺度	知っている				知らない	
		全員	7割	半分	3分の1ぐらい	ほとんど	ぜんぜん
名前	学年の違う人	0.9	3.3	12.2	37.3	42.7	3.6
	学級の違う人	10.5	28.7	28.0	24.4	7.7	0.7
	担任以外の先生	14.8	29.0	25.6	20.1	9.5	1.0
どんな人柄か	学年の違う人	0.7	1.9	6.9	18.5	50.9	21.1
	学級の違う人	1.6	11.1	24.3	32.5	25.9	4.6
	担任以外の先生	2.6	11.6	20.2	28.8	29.4	7.4

設問・あなたは、次のような人のことをどれくらい知っていますか。

○ = 最頻値

知っているが、人柄はわからない。

③学級が違っても、同じ学年の友だちでも、名前だけは知っているが、人柄のわかる人は3分の1程度にすぎない。が、主な結果であろう。全体として、中学生をとりまく人間関係が、①同じ学級、②同じ部活動、③担任の先生に限られ、それ以外は、人柄はむろんのこと、名前も知らないという状況が浮かんでいる。

人間関係が狭く閉ざされているのを暗示するデータだが、表16は、①~⑭のテーマを話し合える友だちが何人くらいいるのかを尋ねた結果である。最頻値に、○を付したので明らかな通り、話す内容と人数との関係を以下のように、3つに類型化できよう。

(1) 話し合う相手がたくさんいるテーマ

- ① きのお見たテレビのこと 50%
- ② 好きなタレントのおわさ 47%
- ③ 先生についてのゴシップ 47%
- ④ マンガ雑誌の記事 43%

⑤ 夏休みに海外へ行く 33%

(7~8人以上はいると答えた割合)

(2) 話し合えるのが2~3人というテーマ

- ① テストの成績が下がった 52%
- ② 好きな相手に気持ちが通じた 48%
- ③ 好きな相手にふられた 47%
- ④ 先生にきつく叱られた 40%
- ⑤ テストの成績が上がった 39%
- ⑥ お金をまきあげられた 38%
- ⑦ 5,000円を拾った 33%

(2~3人いると答えた割合)

(3) 話す相手が1人もいないテーマ

- ① 父親が失業した 60%
- ② 父親が出世をした 46%

(1人もいないと答えた割合)

つまり、たわいもないゴシップなら話し合える友だちは多い。しかし、少し深刻な話題になると、語り合える相手は2~3人に限られてくる。

1-(表16) 話し合える友だちはいるか

→雑談のできる相手は多い

(%)

項 目	話し合える友だち 1人もいない	い る		
		2～3人	5～6人	7～8人以上
① 父親が失業した	60.0	30.9	4.9	4.2
② 父親が出世をした	45.6	32.7	11.0	10.7
③ 好きな子にフラれた	33.6	47.4	11.6	7.4
④ 好きな相手に気持ちが通じた	26.4	47.5	13.8	12.3
⑤ テストの成績が下がった	11.4	51.7	20.0	16.9
⑥ お金をまきあげられた	15.2	37.5	21.0	26.3
⑦ 5,000円を拾った	19.1	33.1	18.2	29.6
⑧ 先生にきつく叱られた	6.3	40.1	25.0	28.6
⑨ テストの成績が上がった	8.4	38.9	23.3	29.4
⑩ 夏休みに海外へ行く	14.2	27.8	25.0	33.0
⑪ マンガ雑誌の記事	8.4	23.3	25.7	42.6
⑫ 好きなタレントのうわさ	12.9	17.1	22.6	47.4
⑬ きのう見たテレビのこと	3.7	19.2	27.5	49.6
⑭ 先生についてのゴシップ	8.9	22.0	22.5	46.6

○ = 最頻値

2. 心の通い合う範囲

今まで、主として、本人が、どの程度心の友を持っているのかを考察してきた。次に、角度を変え、自分が周囲の人からどれくらい知られているのかを、分析してみよう。

表17は、①校長先生、②担任以外の先生、③部活動の友だち、④学級の友だちから、注記したような①～⑥の項目について、どれくらい知られているのかを尋ねた結果である。表中の数値は、「絶対」「たぶん」知っている割

合を示しているが、生徒たちは、それらの人との接触を、以下のように評価している。

①校長先生は自分のことを何も知らないだろう。

②担任以外の先生は自分の名前くらいを知っていると思うが、それ以外は知らないだろう。

③部活動の友だちは、自分の名前と、どこに住んでいるかくらいは知っているだろうが、

自分の心の内はわからないと思う。

④学級の友だちも、部活動の友だちと同じように、自分の名前と住所くらいしかわからないだろう。

校長先生や担任以外の先生はむろんのこと、部活動の友だちや学級の友だちでも、自分のことを知っているのは名前や住所くらいの外見的なことで、内面的なことはほとんどわかっていないだろうという感じ方である。

学校の中で、生徒たちは楽しそうに話している。しかし、こうしたデータを見ると、楽しそうに見えるのは表面的なことで、生徒たちの心は閉ざされ、孤独の影が宿っているのがわかる。そうした大事な意味をもつデー

タと思われるので、表17の結果を詳しく表18に示した。

生徒たちは、友だちでも、自分のことを知っているのは表面的なことで、心の内はわかっていないと思っている。しかし、こうした傾向も、中学1年生の場合なら、中学へ入ってから半年もたっていないので、自分の存在が知られていなくてもある程度やむをえないと考えられる。しかし、中学2年、そして、3年と、中学生生活を重ねていけば、仲間との人間関係が深まり、その結果、心の内もわかりあえるようになって考えられよう。

そうした仮説に基づいて、自分の知名度と学年別の変化を跡づけてみた(表19)。中1

か
倍
う
が
知
だ
の
し
の
解
ら
ぬ

1-(表17) 自分は知られているか

→名前と住所くらいは知られているが

(%)

領域 \ 対象	校長先生	担任以外の先生	部活動の友だち	学級の友だち
名前	19.1	56.1	96.4	97.4
成績	11.7	29.5	23.4	35.5
住んでいる所	7.8	14.1	49.8	51.1
進学したい高校	5.9	8.1	9.4	11.7
悩み	0.9	1.9	6.0	6.5
好きなタレント	1.1	1.5	21.2	30.4

絶対知っている ①
たぶん知っている ②
もしかしたら知っている ③
たぶん知らない ④
絶対知らない ⑤

(%)

- ① あなたの名前
- ② あなたの住んでいる所
- ③ あなたの成績
- ④ あなたの進学したい高校
- ⑤ あなたの悩んでいること
- ⑥ あなたの好きなタレント名

から中3へなるにつれて、知られる割合が2倍に達した項目に○印を付したのでわかるように、学年が上がるにつれて、知られる割合が増加したのは、

①中3になると、校長先生が自分の名前を知っていると思える割合が増す。

②進学したい学校を知っていると思える友だちの割合が増加する。
の2項目にすぎない。この結果は、中学生としての生活を重ねていっても、生徒にとって、の世界が広がらないことを意味している。年輪を重ねれば、それなりに、心理的な空間が広がっていくのが当然であるのに、その広がりを認めにくい。率直なところ、学校は生徒

たちにとって、生活の場として機能していないのではという感想を抱く。

なお、表20は、表19と同じ項目を学業成績に関連させて分析した結果である。「とても得意」から「とても苦手」の5つの項目の中で、「絶対」「たぶん」知っている割合のもっとも高いアイテムに○、もっとも低いアイテムに×印を付した。勉強が得意な生徒の方が、みんなから知られていると思う割合が高く、勉強が苦手になるにつれて、知られる割合が低くなっている。しかし、その差は必ずしも、シャープと言いがたいように思える。

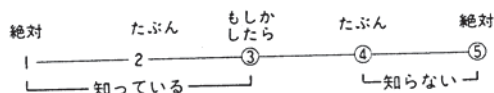
1-(表18) 自分は知られているか

→ クラスメイトでも、心の内は知らないだろう

(%)

領域	対象	校長先生			担任以外の先生			部活動の友だち			学級の友だち		
		知らない		もしかしたら知っている	知らない		もしかしたら知っている	知らない		もしかしたら知っている	知らない		もしかしたら知っている
		絶対	たぶん		絶対	たぶん		絶対	たぶん		絶対	たぶん	
名前		30.3	34.3	16.3	2.3	10.6	31.0	0.9	0.6	2.1	0.6	0.5	1.5
成績		34.5	35.1	18.7	10.0	27.2	33.3	15.5	33.4	27.7	5.9	23.5	35.1
住んでいる所		48.7	35.6	7.9	23.1	44.9	17.9	4.7	18.8	26.7	1.6	15.0	32.3
進学したい高校		52.8	33.1	8.2	41.9	37.1	12.9	46.2	32.0	12.4	34.3	34.6	19.4
悩み		77.0	20.9	1.2	68.1	26.4	3.6	56.0	29.4	8.6	47.1	35.7	10.7
好きなタレント		83.3	14.6	1.0	72.7	22.7	3.1	43.2	20.8	14.8	31.8	19.1	18.7

○ = 最頻値



1-(表19) 自分の知名度×学年

→学年が上がっても、心の内はわからない ○は中1<中3 2倍 (%)

領域	対象 学年	校長先生		担任以外の先生		学級の友だち	
		絶対 知っている	絶対・たぶん 知っている	絶対 知っている	絶対・たぶん 知っている	絶対 知っている	絶対・たぶん 知っている
名前	中1	4.6	11.4	11.8	43.8	85.4	96.5
	2	6.3	18.4	17.3	55.4	83.0	97.5
	3	11.0	27.7	25.0	69.8	88.7	98.4
任んでいる所	中1	2.4	5.8	5.9	11.4	9.2	41.2
	2	2.7	7.3	5.2	12.8	12.0	47.0
	3	3.6	10.5	8.1	18.2	20.6	65.1
成績	中1	2.7	10.3	9.2	25.8	7.0	32.0
	2	3.3	11.7	8.2	26.7	4.8	30.9
	3	4.4	13.5	11.9	35.9	8.9	43.4
進学した学校	中1	1.3	4.4	1.6	4.5	2.2	8.7
	2	1.1	3.9	1.5	5.6	1.5	7.5
	3	2.3	9.2	6.6	14.2	4.0	18.6
幅	中1	0.7	0.9	0.9	2.2	2.0	8.4
	2	0.6	0.7	0.5	1.6	1.5	5.4
	3	0.4	0.8	1.0	1.8	1.1	5.2
好き嫌い	中1	0.9	1.6	0.9	1.8	9.7	28.9
	2	0.4	0.9	0.2	1.6	8.5	29.2
	3	0.4	0.7	0.7	1.2	13.0	33.0

1-(表20) 知られているか×成績

→ 勉強が得意だと知られやすいが

(%)

対象領域	勉強域	得意		苦手		
		とても	やや	やや	かなり	とても
校長先生	名前	○22.4	20.0	×16.4	19.1	21.0
	住んでいる所	○10.5	7.8	×6.8	7.0	9.4
	成績	○15.5	×10.2	10.9	11.8	14.8
	進学したい高校	○7.8	6.1	5.0	×4.5	7.0
	悩み	○2.0	0.6	×0.5	0.8	0.6
	好きなタレント	○2.4	0.6	0.9	1.6	×0.6
担任以外の先生	名前	○60.2	59.4	×52.5	55.7	54.8
	住んでいる所	19.0	12.4	×12.2	15.0	○20.3
	成績	○38.3	28.7	×25.8	28.7	34.2
	進学したい高校	○12.2	8.9	×6.6	7.0	7.6
	悩み	○4.1	1.7	×1.3	2.4	1.4
	好きなタレント	○3.1	1.3	×0.9	2.4	1.7
学級の友だち	名前	○98.3	97.6	98.2	97.0	×94.4
	住んでいる所	○57.4	55.5	48.6	48.8	×44.1
	成績	○55.4	39.6	28.4	×28.1	37.4
	進学したい高校	○19.6	12.7	9.7	×7.6	12.8
	悩み	○10.7	6.4	5.2	×4.0	9.3
	好きなタレント	31.1	×27.2	31.0	30.8	○35.3

絶対・たぶん知っている割合

○ = 最大値

× = 最低値

3. 人間的なコンタクト

今までふれてきたように、生徒たちは、自分の心を知っている友だちは少ないと思っている。しかし、自分は知られていなくとも、自分の方は、相手の心の動きを知っている場合もありうる。

そこで、①違う学級の友だち、②同じ学級の友だち、③同じ部活動の友だちのことを、どれくらい知っているかを尋ねてみた(表21)。この場合も、アイテムの中の最大値に○印を付してあるが、○印は、いずれも、「ほとんど知らない」に集中している。つまり、学級の違う友だちはともあれ、同じ学級そして、同じ部活動の仲間についても、生徒たちは、「誰を好きか」、「何になりたいと思っているか」などを、ほとんど知らないと答えている。

したがって生徒たちは、学校へ通っているといっても、自分の心の内をわかってもらっていないし、そして、自分も相手の心の内を知らない。つまり、他人の関係の中で生活している感じとなる。

同じ年齢の友だちは、たくさんいるが、それは、挨拶をかわす程度の他人にすぎないという。生徒たちは、そうした人たちに、人間的な心の通い合いをもたないのであろうか。

表22は、注記したような設問文で、「病気で入院することになったら、どれくらい心配すると思いますか」と尋ねた結果である。

- | | | |
|---------------|---|----------------------------------|
| あなたが
入院したら | } | ①半分ぐらいの人が心配してくれるだろう—同じ学級と部活動の友だち |
| | | ②ほとんど誰も心配しないだろう—担任以外の先生と違う学級の友だち |

生徒たちの人間的なコンタクトが狭く限られ、同じ学級や部活動の友だちでも半数しか、身内になりえないと答えている。そうした傾

向が、学年を追っても深まらないのは、表19と同じように、表23にも表れている。なお、表24によると、学業成績との関係では、勉強の得意な生徒ほど、相手から心配してもらえらると思う割合が高まっている。換言するなら、勉強が苦手になるにつれて、まわりの人たちから関心をもたれない自分という疎外感をもつ生徒が増加するのであろう。

図5は、表22とは逆に、「次の人たちが病気で入院したと聞いたら、見舞いに行くかどうか」を尋ねた結果を示している。

(1) 見舞いに行くつもりの相手

- | | |
|---------------|-----|
| ①同級の仲の良い友だち | 85% |
| ②部活動の友だち | 62% |
| ③同級のふつうの仲の友だち | 63% |

(2) 見舞うかもしれない相手

- | | |
|-----------|-----|
| ①担任の先生 | 37% |
| ②学級の違う友だち | 37% |

(3) 見舞いに行かないと思う

- | | |
|-----------|-----|
| ①学年の違う友だち | 19% |
| ②校長先生 | 16% |

(「きっと」「見舞いに行くかも」の割合)

しかも、表25が示すように、見舞いへ行くつもりの割合は、担任を例にするなら、中1の48%から、中3の32%へと、中2や中3の方が、むしろ、低下している。学年が上がっていても、心の面でのふれ合いが深まるどころか、むしろ、無関心の割合が増加している。

なお、表26は「見舞いに行くか」と学業成績との関連を調べたものだが、勉強の得意な生徒ほど、先生や友だちに関心を寄せている割合が高い。表24でふれたように、勉強の得意な生徒の方が、まわりの人たちから関心を抱かれていると感じていた。そして、この表26によると、本人も、勉強の得意な生徒ほど、

1-(表21) 友だちのことを知っているか

→ほとんど知らない

(%)

対象領域	尺度	知っている				知らない	
		全員	7割	半分ぐらい	3分の1ぐらい	ほとんど	ぜんぜん
違う学級の人	成績	0.5	3.1	10.1	24.9	42.8	18.6
	好きなタレント	0.6	2.0	6.8	19.6	43.9	27.1
	誰を好きか	0.4	2.0	5.8	19.9	44.4	27.5
	何になりたいと思っているか	0.4	0.8	2.6	8.1	49.8	38.3
	今、悩んでいること	0.3	0.8	2.0	6.0	39.8	51.1
同じ学級の人	成績	5.2	22.6	23.0	23.6	21.1	4.5
	好きなタレント	2.5	10.0	16.3	26.8	32.8	11.6
	誰を好きか	1.1	5.8	10.7	23.3	39.7	19.4
	何になりたいと思っているか	0.6	2.8	7.6	16.6	52.3	20.1
	今、悩んでいること	0.7	1.4	5.4	12.8	44.8	34.9
同じ部活動の人	成績	4.2	11.2	14.6	20.6	33.3	16.1
	好きなタレント	1.4	4.4	7.9	16.7	38.8	30.8
	誰を好きか	1.7	4.6	6.8	16.9	37.3	32.7
	何になりたいと思っているか	0.4	1.4	4.1	8.6	47.9	37.6
	今、悩んでいること	0.6	1.5	3.3	6.0	37.7	50.9

○ = 最頻値

1-(表22) 心配してくれるか

→ 同級学級か、部活動の友だちくらい

(%)

対 象	心 配 す る だ ろ う				心 配 し な い	
	全 員	7~8割	半分ぐらい	3~4割	ほとんど	誰 も
① 違う学年の人	1.8	2.0	4.2	13.2	49.7	29.1
② 違う学級の人	2.6	5.6	12.6	29.9	38.1	11.2
③ 担任以外の先生	3.7	6.6	14.5	24.0	37.5	13.7
④ 同じ部活動の人	11.7	20.4	23.2	21.3	16.5	6.9
⑤ 同じ学級の人	9.3	19.5	27.6	23.5	15.5	4.6

設問・あなたが病気で入院することになったら、次の人たちは、どれくらい心配すると思いますか。

○ = 最頻値

積極的に行動するという。この場合、周囲から関心をもたれる、あるいは、自分から関心を寄せるの、いずれが優位であるかはともあれ、人間関係に閉ざされた中学生徒の中で、学業成績に自信のある生徒たちが、例外的に、人間関係のネットワークを広げているように見える。

こうした傾向は図6と図7にも表れている。これは、「担任の先生は自分のことを心配してくれるか」「学級の友だちは自分のことを心配してくれるか」について、数量化Ⅱ類で分析した結果を示しているが、2つのグラフとも、①~⑥のアイテムの中で勉強の得意、

不得意が大きな説明力をもつのは、カテゴリ・スコアからも明らかであろう。

ここで、今までふれてきた内容を要約するなら、以下のような4点に、その結果をまとめることができよう。

①学校の中の生徒たちの心理的空間は、学級か部活動という狭い範囲に閉ざされ、それ以外への広がりを示していない。

②しかも、その限られた範囲でも、お互いにわかっているのは、名前や住所などの外見上の接触だけで、心の内はほとんどわからないという。

③さらに、そうした人間的なふれ合いの浅

1-(表23) 心配してくれるか×学年

→学年が上がっても、人間関係は深まらない

(%)

対象	学年	尺 度	心配する			心配 するかも	心配しない		
			とても	かなり	小計		たぶん	ぜんぜん	
担任の先生	中	1	21.1	23.7	44.8	39.7	8.9	6.6	
		2	15.2	21.3	36.5	40.8	12.1	10.6	
		3	19.8	20.3	40.1	40.3	9.3	10.3	
校長先生	中	1	9.0	13.1	22.1	39.8	21.1	17.0	
		2	6.8	8.1	14.9	34.0	24.1	27.0	
		3	5.1	10.9	16.0	36.6	21.2	26.2	
対象	学年	尺 度	心配するだろう					心配しない	
			全員	7~8割	小計	半分ぐらい	3~4割	ほとんど	誰も
同じ学級の人	中	1	7.7	23.2	30.9	28.9	21.8	13.7	4.7
		2	8.2	16.8	25.0	28.1	25.9	16.8	4.2
		3	11.9	18.0	29.9	25.7	23.2	16.2	5.0
同じ部活動の人	中	1	10.0	18.1	28.1	24.4	23.2	17.6	6.7
		2	13.0	18.8	31.8	22.4	22.8	16.8	6.2
		3	12.4	24.5	36.9	22.7	17.7	14.9	7.8
担任以外の先生	中	1	4.9	7.4	12.3	16.4	24.8	34.3	12.2
		2	3.5	4.6	8.1	12.7	21.3	42.5	15.4
		3	2.5	7.6	10.1	14.0	25.6	36.6	13.7

さは、学年が上がっても、深まりを見せることがなく続いていく。

④そうした中で、成績の良い生徒たちは、まわりの人も自分に関心をもってくれていると思えるし、自分も周囲の人たちに関心を抱いている割合が高い。

このように見てくると、学校という社会は

生徒にとってどんな意味をもつのかという疑問が生じてくる。もちろん学校は、知識や技術の伝達を狙いとする場であろうし、それが、主目的となるのは否定しがたい。それにしても、何十人そして何百人の仲間が生活を共にして、どうして心の通い合いが生じないのか。不思議という感じすらしてくる。

1-(表24) 心配してくれるか×成績

→ 勉強の得意な子は心配してもらえと思う

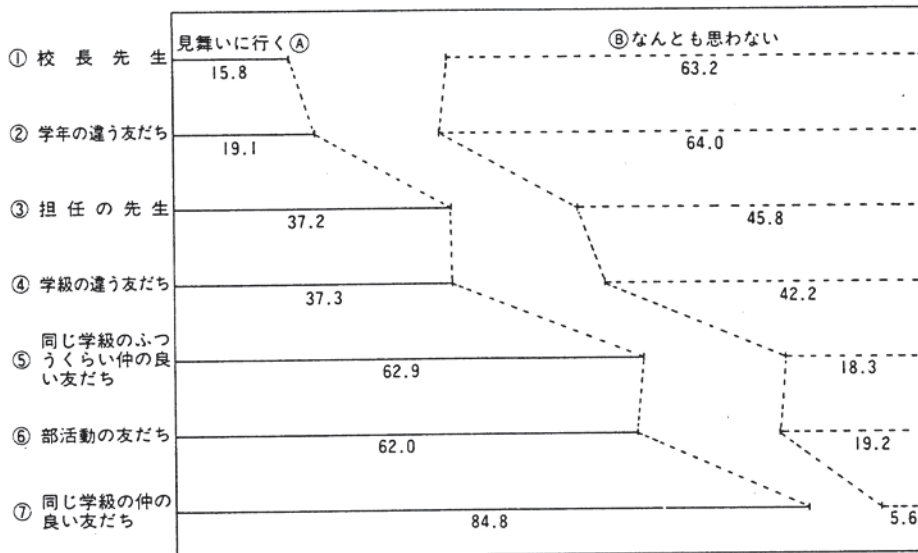
(%)

対象	勉強の程度	得意		苦手		
		とても	やや	やや	かなり	とても
担任の先生	とても心配	25.0	24.2	15.7	14.2	14.3
	とても・かなり心配	56.1	> 49.9	> 35.8	> 31.6	> 26.1
校長先生	とても心配	10.1	8.2	5.2	4.6	9.7
	とても・かなり心配	26.0	> 20.7	> 14.6	14.5	16.3
学級の人	全員心配	14.8	10.5	7.7	7.3	7.9
	7割以上心配	41.9	> 32.8	> 26.2	> 21.0	22.3
部活動の人	全員心配	13.9	12.9	10.5	8.3	14.3
	7割以上心配	37.9	> 35.9	> 30.4	> 25.4	29.1
担任以外の先生	全員心配	7.8	3.4	2.8	3.2	33.4
	7割以上心配	16.3	> 12.4	> 8.3	> 7.8	> 7.2

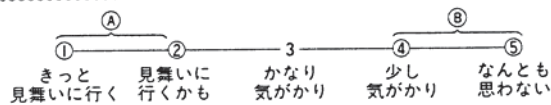
1-(図5) 見舞いに行くか

→ 同じ学級か、同じ部活動の友だち

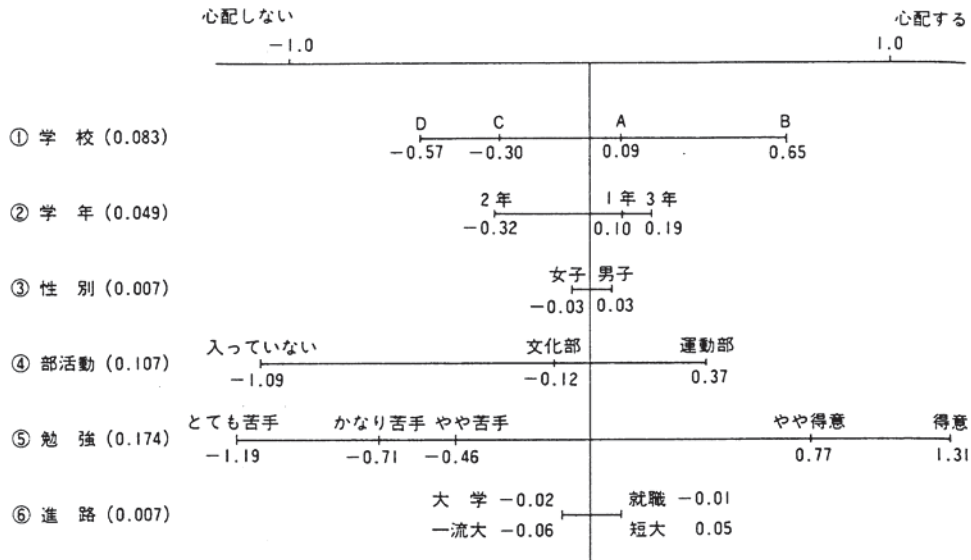
(%)



設問・次の人たちが病気で入院したと聞いたら、あなたはどう思いますか。



1-(図6) 担任の先生は自分のことを心配してくれるか



1-(図7) 学級の友だちは自分のことを心配してくれるか

